

## 軍都を彩った桜並木 「植えられた桜の本数の真実」

宇都宮伝統文化連絡協議会長 柏村 祐司



立派に育った桜並木



桜植樹直後の軍道

足利銀行本店前の道路を桜通りという。昭和三十八年までここに桜並木があったからである。当初は、軍道といった。日露戦争中に創設された旧陸軍第十四師団は、戦後、姫路に帰還、その後明治四十年九月、宇都宮が駐屯地となった。翌四十一年から四十二年にかけて師団司令部ほか兵営が旧国本村、城山村、姿川村に建設され、併せてこの間の兵営を結ぶ道路がつくられた。このうち師団司令部（現・国立宇都宮病院）から野砲兵第二十連隊（現・文星大学付属高校・宇都宮短大付属高校）を結ぶ中心的な道路を軍道と呼んだのである。

この軍道開設を記念して、師団司令部正面から日光街道まで、あわせて日光街道交差点から現睦町交差点までの間の道路の両側にソメイヨシノ桜が植樹された。大正中期頃には見事な花をつけ、軍道の桜並木と呼ばれるようになり、栃木県を代表する桜の名所となった。それが昭和三十八年、桜が老木化したことや自動車交通の支障をきたすということで伐採されたのである。今では「桜通り」の名と足利銀行の北より横断歩道橋に接して建てられた「桜並木ここにありき」の記念碑によって、往時を偲ぶだけとなっている。

ところで軍道に桜が誰等によってどんな目的で植えられたのかは案外知られていない。植えられた本数に至っては、諸説あり「桜並木ここにありき」の記念碑を見学に来た者を惑わす始末である。本数について、記念碑に添えられた「桜通り由緒の記」には五百余本とある。ところがその脇に掲示された「宮の細道桜並木碑」立札には何と五千本とある。桜並木碑は、『うつのみやの歴史』（発行宇都宮市）に五千本とあるのでそれを参考にしよう。ともあれ見学者はどちらの碑文を信じたらよいのか戸惑ってしまう。

しかし、そんな問題を見事に解き明かしてくれるものがある。陸上自衛隊宇都宮駐屯地内に保存されている「桜植樹記念碑」である。桜植樹が完了した後の明治四十四年三月建立されたもので、もともと軍道と大谷街道交差点北西角にあったものだという。碑文によれば大略、兵舎周辺の道路も広く、平坦に造成され、郡市の農民や商人も等しくその恩恵を受け、交通も便利となった。わが国には「花は桜木、人は武士」の言葉があるが、軍人たちに大いに武士道を發揮していただくために、河内郡長梅村寛逸と宇都宮市長本多遠吉等が相謀り、桜の苗木千本余を新道の両側に植えた」とある。

桜の本数は、千本余が正しかったというわけである。ちなみに植樹したばかりの頃の写真を参考に掲載した。何かの記念式典の折に撮影したものと思われる。一面の麦畑に真新しい軍道。よく見ると道路の両側に桜が植樹されている。苗木の間隔は四メートルくらい、二手口の軍道の両側に植えると片側五百本、両側で千本、納得行く計算である。それにしてもどうして五百余本、五千本という数字になったのであろうか。実に不可解である。

「桜並木ここにありき」も『うつのみやの歴史』も簡単に文章を書き換えることが出来ない。ならばと思いついて「桜植樹記念碑」の存在を明らかにし、桜並木の由来を紹介した次第である。